

予後良好であった。dCT は脳血管写に代わる検査法であり、早期から回復することは、症候性 spasm の治療に有用と考えられた。

2A-123) MRA による破裂及び未破裂脳動脈瘤の診断とその限界

石井 伸明・板本 孝治  
 内沢 隆充・下山 三夫  
 小岩 光行・川口 進 (柏葉脳神経外科)  
 柏葉 武 (病院)  
 青樹 毅・宝金 清博 (北海道大学脳神経)  
 阿部 弘 (外科)

【目的】Time-of-Flight MRA による破裂及び未破裂脳動脈瘤の検出能についてそれぞれ検討した。また、検出不能・困難例については、その原因の検討を行い、MRA による診断の問題点と限界を考察した。

【方法】対象は、破裂脳動脈瘤20例、及び未破裂脳動脈瘤18例。使用装置は、Siemens 社製 Magnetom SP (1.5T) で、FISP 3D Time-of-Flight 法による MRA を得た。

【結果】破裂脳動脈瘤では20例中19例で、未破裂脳動脈瘤では18例中13例で診断可能であった。非検出率は38例中6例16%で、原因として 2mm 以下の小さな動脈瘤、非分岐部動脈瘤、他血管との重なり、SAH clot による T1 effect などが考えられた。

【結論】MRA は、脳動脈瘤の診断に有用であるが、更に検出能を向上させるためには、空間解像度の改善、Reconstruction 法の工夫が必要であり、限界点としては、非分岐部動脈瘤と血管壁不整との鑑別、血腫の T1 effect の影響などが考えられた。

2A-124) 脳動脈瘤診断における Target MRA の有用性

田邊 純嘉・端 和夫 (札幌医科大学)  
 脳神経外科  
 中川 俊男 (新さっぽろ脳神経)  
 外科病院

MRA は非侵襲的に脳血管像を描出できるため、脳神経外科の日常診療において脳動脈瘤の検出に使用されているが、通常の MRA では他動脈との重複や動脈分枝の重複により動脈瘤の診断に困難が生じる事がある。このような症例に対して、我々は単一血管に FOV を設定して MIP 処理を行う Target MRA を使用し、脳動脈瘤検出率の向上を図っている。今回は動脈瘤診断にお

ける Target MRA の有用性について検討したので報告する。

昨年4月より MRA を 791 例に施行し、動脈瘤疑診43例に Target MRA を行った。動脈瘤は前交通動脈15例、中大脳動脈7例、内頸動脈18例、多発性13例であり、MR 機種は Signa Advantage 1.5T と MAGNETOM 1.0T を使用し、3D-TOF 法で撮影し、DSA と比較検討した。Target MRA では正診率は 37/43 例 86.0%、false positive は 5/43 例 11.6%であり、false negative は 1 例のみであった。通常の MRA では IC-PC、前交通動脈の動脈瘤の診断が困難であり、Target MRA は IC-PC、前交通動脈、VA-PICA 動脈瘤の判定に有用であったが、反面 false positive の 4/5 例が前交通動脈瘤であった。

第26回新潟救急医学会

日 時 平成5年7月24日(土)  
 午後2時~

会 場 新潟市民病院救命救急センター  
 南棟講堂(2階)

I. 一般演題

- 1) 当院救命救急センターにおける急性期呼吸管理を要した小児例の検討

渡辺 徹・佐藤 雅久  
 阿部 時也・小林 恵子  
 岩谷 淳・坂野 忠司 (新潟市民病院)  
 小田 良彦 (小児科)  
 広瀬 保夫・三井田 努 (同救命救急)  
 本多 拓 (センター)

当院救命救急センター開設以来6年が経過し、小児科においても重症患者を治療・管理する機会が増加した。今回救命救急センターに入院となった小児科患者のうち、急性期に呼吸管理を要した例について検討した。

症例は74例(男児42例、女児32例)で、年齢は1か月から17才8か月(平均3才9か月)、人工換気期間は1日から156日(平均10日)であった。

疾患分類では、神経系36例(48.6%)、呼吸器15例(20.3%)、循環器8例(10.8%)、不慮の事故7例(9.5%)、その他8例(10.8%)であった。

神経系では、脳炎、重度心身障害児の肺炎、けいれん重積が、呼吸器では乳児の百日咳、喘息が、不慮の事故